

津軽平野における縄文時代以降の遺跡立地と地形環境

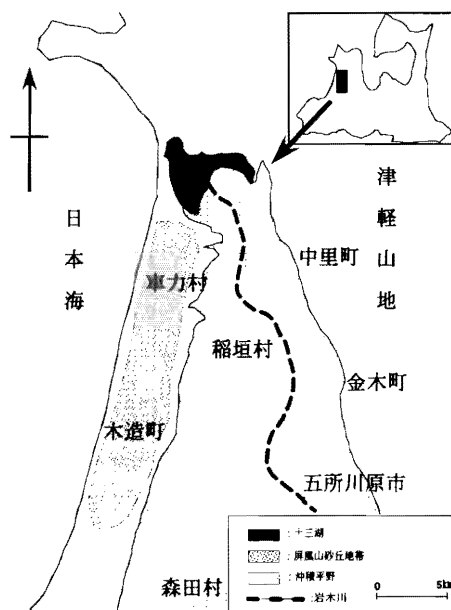
大塚 由香里

I はじめに

津軽平野およびその周辺の地域は、亀ヶ岡遺跡に代表される多くの遺跡が立地し、東北地方の考古学文化を考える上で極めて重要な地域であると考えられている（村山ほか，1984）。これまでの津軽平野における自然地理学の研究は、海津（1976）や村山ほか（1984）のような、地形形成過程や海水準変動などから平野の発達史を明らかにするものが多く、津軽平野における遺跡と復元された古地理との関係を検討した研究は少ない。そこで本研究では、津軽平野の地形や気候、古十三湖の海岸線変化など、主に自然地理学の観点から、津軽平野における縄文時代以降の遺跡の立地、人間活動と自然環境との関係を明らかにしたい。

II 研究対象地域の概観

本州の北西端、津軽半島の南西部に位置する津軽平野は岩木川によって形成された、南北50km、東西5～20kmに及ぶ広大な三角州や扇状地性低地である。この津軽平野一帯は縄文海進時以降、古十三湖における海岸線の変化や屏風山砂丘地帯の砂丘の形成などにより、その地形環境に大きな変化が見られた地域であり、それらの変化の中で亀ヶ岡遺跡に示されるような人間活動の痕跡が残されてきた重要な地域でもある。そこで、市浦村から森田村までのおよそ30 kmに及ぶ津軽平野北部一帯を調査対象地域とする（第1図）。ただし、稲垣村、柏村に関しては、遺跡の存在が確認されるのが平安時代以降からであるため、調査地域対象外とする。



第1図 調査地域の概観

III 研究方法

本研究では、GIS（地理情報システム）を用いて研究を行う。国土地理院発行の2万5千分の1の数値地図（地図画像）上に青森県教育委員会（1998）の青森県遺跡地図を基に研究対象地域周辺の縄文時代以降の遺跡分布図を作成し、重ね合わせる。さらに、その上に青森県農林部農地計画

課（1995）の小泊・金木・五所川原の5万分の1の地形分類図を重ね合わせ、遺跡分布図（第2図）を作成する。次に、縄文時代前期・中期・後期・晩期・弥生・平安・中世・近世の8つに分類し、年代ごとにそれぞれ作成し（第2図）、縄文時代前期から近世にいたるまでの各年代における遺跡立地の特徴や地形との関係について考察する。

古十三湖の海岸線の移動については、津軽平野における古地理の変遷を行った海津（1976）を用い、海岸線の海退速度を一定と仮定して、年代を古いほうから順に海水域1（約6000～5000年前）、海水域2（約5000～4000年前）、海水域3（約4000～3000年前）、海水域4（約3000～2500年前）、海水域5（約2500年前～）の5つに分類した。ここから海岸線の変化にともなう海水域を求め、各時代別に作成し、第2図と重ね合わせ、時代ごとの海岸線の変化にともなう遺跡分布の変遷について考察する。また、当時の植生の変化と遺跡の分布についての対応関係をみるため、安田（1973, 1982）を参照し、津軽平野における自然環境の変化と遺跡の分布および変遷について考察していく。

IV 津軽平野における遺跡立地と分布

津軽平野の中でも研究対象地域内における遺跡数は、2005年現在、縄文時代前期から近世に至るまで、時代を重複する遺跡も含めおよそ175の遺跡の存在が確認されている。ここでは第2図を用いて津軽平野全体での各時代における遺跡数とそれらが立地する地形的特徴、および遺跡分布の傾向について考察した。

縄文時代前期から近世にかけての各時代別に津軽平野全体における遺跡数とそれらが立地する地形的特徴、および遺跡分布の傾向についてみると、縄文時代前期から近世までの全体を通して、遺跡は主に山田野面上に立地している。山田野面とは、最終間氷期最盛期の海進に伴って形成された段丘面を指し、津軽平野周辺に広く分布している。また、縄文時代前期や晩期では遺跡の分布がみられない地域もあり、多少は遺跡の分布に偏りがみられたが、津軽平野及びその周辺地域全体としては、時代ごとの遺跡の立地場所にそれほど大きな変化はみられなかった。

よって、次章ではこれらを基に、津軽平野及びその周辺地域において時代を通して約8割以上の遺跡が立地している地形面、すなわち山田野面が広範囲に分布し、田小屋野貝塚や亀ヶ岡遺跡など縄文時代以降の代表的な遺跡が数多く存在する屏風山砂丘地帯に焦点を当て、縄文時代以降の遺跡の分布と自然環境との関係について詳細に考察する。

V 屏風山砂丘地帯における遺跡分布と地形環境

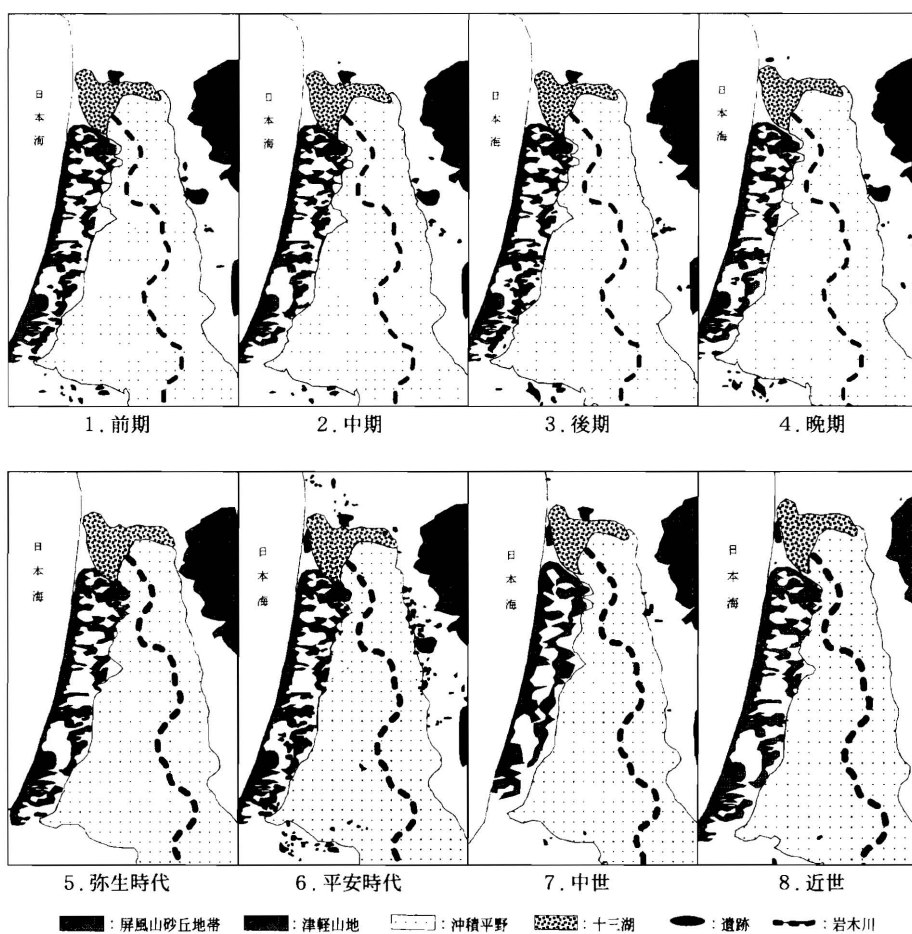
1. 遺跡の分布と地形との関係

第2図の縄文時代前期から晩期までの屏風山砂丘地帯における遺跡の分布に着目する。この図から、遺跡は時代を通して、主に屏風山砂丘地帯の南部に分布する傾向がみられる。また、屏風

山砂丘地帯における南北の砂丘地の分布をみると、北部に比べて南部は砂丘地の分布も狭く、規模も小さいことがわかる。よって、屏風山砂丘地帯の南北では地形が異なることが考えられる。そこで、この違いについて検討するために、屏風山砂丘地帯の南端にある海食崖の1地点（第3図）から、屏風山砂丘地帯南部の地形について考察した。その結果、下部は第三紀



写真1：屏風山砂丘地帯南端における海食崖



第2図：縄文時代以降の遺跡分布図

層の鳴沢層、その直上は山田野面を構成する山田野層によって形成されている屏風山南部地帯における海食崖は、山田野層、鳴沢層とも浅い谷によって切られていることが確認できた（写真1）。この浅い谷は、氷期の低海水準期に形成された開析谷と考えられ、屏風山砂丘地帯南部にいくつも存在し、地表面では浅い凹地のような形態をして存在している。また、屏風山砂丘地帯南部において溜め池や沼が多いことも開析谷が存在するためであり、開析谷より水を貯めやすい、地下水のわきやすい環境を形成しているといえる。つまり、屏風山砂丘地帯南部では山田野層・鳴沢層を切る浅い谷が存在することで、この地域一帯は人間が生活を営むために必要不可欠な水を得やすく、生活の場として適した環境であったため、遺跡が集中して立地したと思われる。

2. 遺跡の分布と気候の変化との関係

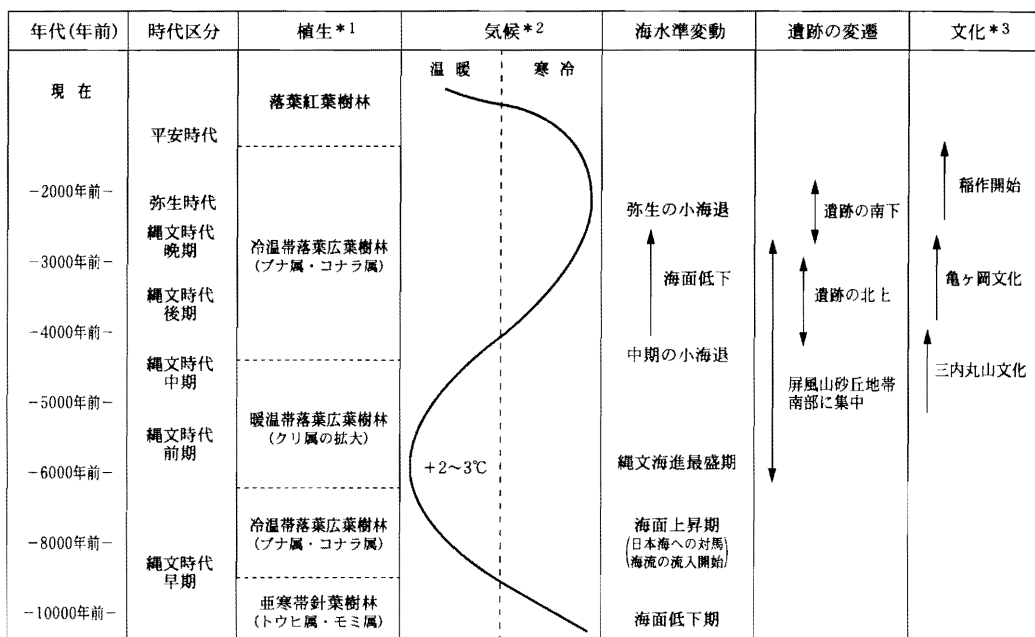
日本の縄文文化は、後氷期の気候変化と密接な関わりの中で成立・発展そして衰退していった文化であると考えられている（安田1982）。また、気候は植生の変化やそれともなう人間の生活空間にも変化を及ぼす、環境を決定する重要な要因の1つであると思われる。そこで、この節では主に安田（1982, 1983）を参照し、調査地域周辺における縄文時代前期から平安時代に至るまでの気候の変化を復元し、これらと遺跡の分布の関係について考察する。

縄文時代前期は、気温も現在より2～3℃高い、温暖な気候下にあった（安田, 1982）。この時期、津軽平野およびその周辺地域は暖温帯落葉広葉樹林に覆われ、人間が生活しやすい環境下であったと考えられる。三内丸山文化の繁栄もこの時代のことであることが、その1つの裏づけであろう（第3図）。

しかし、温暖な気候も中期の終わりから徐々に冷涼化し、植生も冷温帯落葉広葉樹林へと移行する（第3図）。遺跡の数は冷涼化が開始する中期には減少するが、後期には屏風山砂丘地帯南部を中心に再び増加する。また、冷涼化するこの時期に、屏風山砂丘地帯における遺跡の北上が見られ、さらに三内丸山の衰退・消失と亀ヶ岡文化の繁栄がこの時期にあたると考えられることも興味深い（第3図）。

縄文時代晩期以降も気温は徐々に低下し、弥生時代には本格的な寒冷化がはじまった（第3図）。県内全域は冷温帯落葉広葉樹林で覆われ、遺跡も大幅に減少し、特に屏風山砂丘地帯北部では遺跡はほとんど確認できず、南部の南端付近でみられた。このような遺跡分布の変化は、本格的な寒冷化により津軽平野北部での生活が困難になったためであると思われる。しかし、寒冷化が終わり、再び温暖な気候に恵まれた平安時代には津軽平野周辺地域にて遺跡は大幅に増加する。

このように気候の変化およびそれに伴う植生の変化は、遺跡の分布に少なからず影響を与えていると考えられる。しかし、縄文時代中期から後期にかけての屏風山砂丘地帯における遺跡の北上と気候の変化には対応関係がみられず、むしろ寒冷化にともない北へ移動するという逆の傾向がみられた。そこで次節では、自然環境の変化の1つである海岸線の変化と遺跡の変遷について年代ごとに詳細に考察していく。



第3図：縄文時代以降の環境変遷図

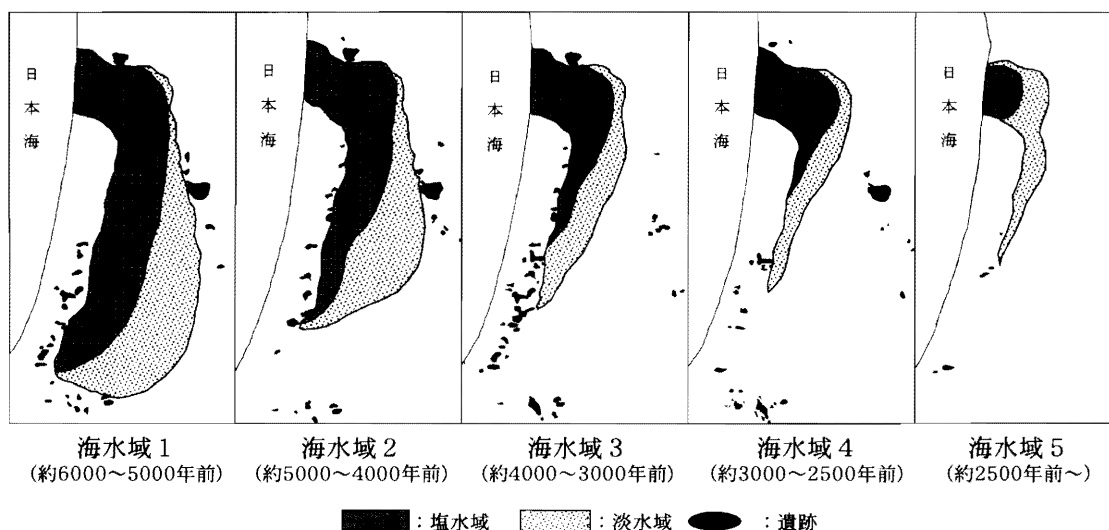
*1：安田（1982） *2：安田（1982） 内嶋・小島（1997） *3：青森県立郷土館（1984）
青森県史編さん考古部会（2002）

3. 遺跡の分布と海岸線の変化との関係

第4図は海水域の変化と遺跡の変遷を年代別に示したものである。縄文海進最盛期に相当する縄文時代前期には海岸線が内陸に深く入り込み、海水域は現在の五所川原付近にまで及んだとされている（海水域1）。この時期の遺跡は9割以上が山田野面上に分布している。つまり、この時期の遺跡は、海進の影響を受けないよう、高台に集中して立地したと考えられる。

縄文時代中期から後期にかけては、海水域は海退やそれとともに岩木川による沖積平野の形成が活発化した時期にあたり、特に塩水域が著しく縮小したと考えられる（海水域2・3）。また、屏風山砂丘地帯の北部に遺跡が分布し始めるのもこの時期からであり、海水域の縮小と遺跡の北上には対応関係があると考えられる。

さらに、この屏風山砂丘地帯における遺跡の北上は興味深いことに三内丸山文化が衰退した時期と前後して起こった現象である。三内丸山遺跡は約5500～4000年に栄えたムラの跡で、温暖な気候下に繁栄した文化である。また、花粉分析の結果から、三内丸山での居住が開始するとともにナラ類やブナからなる落葉広葉樹林は衰退し、それらがクリ林に変化していったことがわかる。よって三内丸山では、より安定した食料の供給および生活を求め、人間が落葉広葉樹林を取り払い、その代わりにクリ林を造りあげたと考えられている。つまり、三内丸山衰退の最大の原因は寒冷化にともないクリの栽培ができなくなり、これまでのクリ中心の食生活が営めなくなったことにあると考えられている（青森県史編さん考古部会，2002）。そこで、人々は生活の場と



第4図：海水域の変化と遺跡の変遷

して、採集のみではなく、漁労もできるところを選択し、当時まだ内湾が広がっていた津軽平野北部へと食料を求めて移動し、なおかつ、海退にともない海を求めて屏風山砂丘地帯の北部へと北上していったのではないかと考えられる。

しかし、三内丸山文化は冷涼化の中で衰退していったのに対し、それ以上に冷涼化の中で繁栄した文化もある。それが亀ヶ岡文化である。では、三内丸山は冷温帯落葉広葉樹林に覆われたことで文化が衰退し、ムラが消滅していったのに対し、なぜ同じように冷温帯落葉広葉樹林に覆われていた亀ヶ岡では文化が繁栄したのだろうか。

亀ヶ岡遺跡が立地する周辺地域では、中期から後期にかけての海退によって低地部は徐々に植物に覆われ、湿地化していった（青森県立郷土館，1984）。その後、湿地は徐々に乾地へと変わり、遺跡の北上がみられる約3000年前からようやく人間が生活できるような環境になったのである。つまり、三内丸山がクリの栽培によって繁栄していたころ、亀ヶ岡周辺では海進の影響を受けていたため、居住できる場所は丘陵地のみであったが、三内丸山が衰退した後、海退が進むにつれて丘陵地に加え低地などでもようやく生活できる空間が整ったと考えられる。つまり、亀ヶ岡の人々は生活を営む空間を台地上に固定し、埋積が進んだ亀ヶ岡周辺の低湿地を水の供給源や栽培したク리를調理・加工するなど、食べ物を工夫するための補助的な空間としてうまく利用していたのではないかと考えられる（青森県立郷土館，1984）。亀ヶ岡の人々は三内丸山の人々のようにク리를栽培し、漁撈に頼るだけではなく、主にク리의栽培を食生活の中心とすることで安定した生活を営めることができるようになり、そこに亀ヶ岡文化が発祥し、繁栄したのではないかと考えられる。つまり、遺跡の北上は単に海に食料を求めるためだけではなく、人間が生活できる環境が海退にともない徐々に北側にも形成されていったということも示唆していると考えられる。

しかし、このような海水域の変化と遺跡の変遷の対応関係は、縄文時代晩期以降（海水域4）、本格的な寒冷化が始まる（海水域5）と見られなくなる。遺跡の分布は北部ではほとんど確認できなくなり、南部にやや集中する形態をとる。これは、寒冷化にともない津軽平野北部での定住が不可能になったことに加え、青森県南部で稲作が開始したためであると考えられる。つまり、漁労や採集中心の自然に存在するものを直接利用するやり方から、自然環境の変化の中で、自然をうまく利用して農産物（米）を生産するという間接的なやり方へと、食生活の対象および獲得方法が変化したためとであるとえられる。

以上のように、気候変化に伴う海岸線の変化は遺跡の分布や人間の生活に明らかに影響を及ぼしていると思われる。

VI おわりに

津軽平野およびその周辺地域における縄文時代以降の遺跡の立地と分布について、地形・気候・海岸線の変化などの自然環境の変化との関係について考察を行った。その結果、自然環境の変化と遺跡の変遷には明らかな対応関係が見られ、自然環境の変化は、文化の繁栄・衰退など過去の人間活動に影響を及ぼしていたことが明らかとなった。今後も引き続き自然地理学・考古学との両方の視点から、自然環境の変化と人間活動との関わりを研究することが、過去の自然環境や人間活動を明らかにする上で必要であると考えられる。

【参考文献】

- 青森県教育委員会（1998）：青森県遺跡地図，青森県教育委員会
- 青森県立郷土館（1984）：青森県立郷土館調査報告第17集・考古 - 6 亀ヶ岡石器時代遺跡
- 青森県立郷土館（1998）：青森県立郷土館調査研究年報第22，79-104.
- 青森県史編さん考古部会（2002）：青森県史 別編 三内丸山遺跡3-18，45-62，227-263.
- 吾妻崇（1995）：変動地形からみた津軽半島の地形発達史. 第四紀研究，34，75-89.
- 海津正倫（1976）：津軽平野の沖積世における地形発達史. 地理学評論，49，714-735.
- 遠藤邦彦・辻誠一郎（1977）：青森県西津軽郡出来島海岸の第四系. 日本大学文理学部研究紀要，12，1-11.
- 角田清美（1978）津軽屏風山砂丘地帯の地形について. 東北地理30-1，15-23.
- 内嶋善兵衛・小島圭二（1997）日本の自然2 東北. 岩波書店，12-19.
- 安田喜憲（1973）：東北地方における後氷期後半の気候変化. 地理学評論，46，107-115.
- 安田喜憲（1982）：気候変動. 加藤晋平・小林達雄・藤本 強 編「縄文文化の研究Ⅰ」雄山閣出版，163-200.
- 村山磐・松本秀明・宮城豊彦（1984）：津軽平野の沖積層およびその周辺の地形. 東北学院大学東北文化研究紀要，15，200-206.